関連単元名	武士の文化と民衆の成長	展示コーナー	D	武士の世へ
		資　料　名	中世の信仰、寺院や供養塔	

中世の主な寺院と神社・磨崖仏

木造十一面観音立像　複製

原町市泉の観音堂の本尊として安置されている。泉地区は行方軍衙跡と推定される。「泉廃寺跡遺跡」があり、また泉長者伝説がある地区である。象高160.6cmの彫眼、寄木造で、内側に弘安６年(1283)銘のある鎌倉時代後期の作である。県指定文化財

中世の信仰

源頼朝による奥州合戦と、その後の武士団の移住・開発は、この地方にも武士の文化的要素が広まる契機となった。また、南北朝・室町・戦国期と移り変わる中で、人々の往来が繁く、また地方の領主武士などが寺院・神社を建立し、神社信仰や鎌倉新仏教もこの時期に広く庶民の間に広まった。

▲ 中世供養塔

神社信仰では、妙見・熊野・八幡・稲荷・諏訪信仰などが土着の神々信仰と結びついて広まったいった。中世後半には神社信仰とともに修験として本山派（京都聖護院に属す）上之坊寛徳寺、羽黒派（出羽の羽黒山を中心とする）日光院（現在の日光寺）の勢力が強く、近世まで続いた。

寺院は、もともと天台・真言の二宗で、のち他宗へかわる寺院もあったが、真言宗寺院は現在でも多くある。曹洞宗は15世紀末より広まり、相馬家の帰依も受けている。浄土宗は15世紀初頭より伝えられた。

またこの時期の信仰のあり方を示す供養塔として、寛元２年（1304）銘のものがある。